

講演

「台湾語映画と林搏秋」と

台湾語映画

『五月十三傷心夜』

鑑賞の夕べ

台湾の映画史は日本統治時代と1945年以降に分けて把握される。1945年以降、台湾の公立映画製作所が制作する映画はドキュメンタリー映画とプロパガンダ映画に偏重していた。台湾語による映画は1956年の歌仔戯「薛平貴與王寶釧」のヒットを嚆矢とし、民間の映画撮影所におけるドラマ映画の制作ブームをもたらした。1970年になって急速に衰退するが、この間制作された映画は1000本を超える。林搏秋（1920 - 98年）は、戦前明治大学で学び、卒業後、ムーラン・ルージュ新宿座の文芸部に籍を置き、また東宝映画に駆り出され、マキノ正博監督作品などの助監督を務め、台湾に戻ってからは演劇、映画の分野で活躍した。今回は石婉舜氏に台湾映画史における台湾語映画の紹介と林搏秋監督の位置づけについてお話し頂き、その後、林搏秋監督作品の1つである『五月十三傷心夜』（1965年、97分、英語字幕付き）を鑑賞する。台湾語映画の紹介と上映の機会は多くはなく、本学の学生・教員だけでなく、一般参加者の関心にも応えるものだと考える。



講師：石婉舜（SHIH Wan-shun、シイ・ワンシュン）

（国立清華大学台湾文学研究所副教授 / 2024年度本学招聘研究員）

2024年11月13日（水）18:00～21:00

立教大学池袋キャンパス8号館8202教室

中英字幕付き

入場・参加無料

定員先着150名 右のQRコードからお申し込みください。



主催：アジア地域研究所

共催：異文化コミュニケーション学部～学部公開講演会『言語と社会や文化をくつなく>世界と切り結ぶ異文化コミュニケーション』の一環として～、台湾・王默人周安儀文學講座

お問合せ / 立教大学アジア地域研究所 ajiken@rikkyo.ac.jp